

# 阿波国府跡第2次調査概報

— 1 9 8 3 年 度 —



1984

徳島市教育委員会

# 阿波國府跡第2次調査概報

— 1 9 8 3 年 度 —

1984

徳島市教育委員会

## 序

奈良時代には中央集権の律令制国家の強力な集約化の中で、消費生活の雄大さが進展し、平城京をはじめとする諸京の造営・官立諸寺院などの造営が顕著に認められ、このような情勢下で、阿波国府も地方政府として造営されたものです。

阿波国府は、徳島市国府町府中の大御和神社を中心に展開したといわれますが、長い歴史を経るうちに幾多の変遷があり、威容を誇ったと思われる当時の府域や政府の建物は地下に眠っています。

昨年度より 6 ヶ年計画で、国庫補助を受けて、県下でも最大級の遺跡である阿波国府跡の府域及び政府の規模・構造などの確認調査を実施しております。

本遺跡の調査によって、該期の歴史的環境の復元とともに文化と技術の伝播状態を把握する上での貴重な資料が提供されるものと思います。

最後に、調査にあたりまして、ご指導・ご助言をいただきました水野正好・田中 琢両先生をはじめ、地元の研究者の方々とともに、地元及び地権者の方々の真摯なご助力に対して深く感謝いたします。

昭和59年 3月31日

徳島市教育委員会

教育長 七 條 力

## 例　　言

- 1 本書は、国庫補助を受けて、徳島市国府町府中字田渕の大御和神社の周辺を中心として実施した「阿波国府跡」の重要遺跡確認調査(第2次調査)の概要報告である。
- 2 発掘調査は、徳島市教育委員会が主体となり、「阿波国府跡発掘調査団」を編成して、昭和59年3月1日から3月31日まで実施し、事務処理については徳島市教育委員会社会教育課が担当した。
- 3 検出遺構の実測図については、調査員・調査補助員が分担した。遺物整理については、調査員・調査補助員の協力を得て実施し、遺構・遺物の写真・実測及び製図については、一山 典が担当し、一部滝山雄一の協力をえた。
- 4 掲図の第1図については、建設省国土地理院発行の2万5千分の1の地形図（石井図幅）を転載したものである。
- 5 本書の執筆・編集は、滝山雄一の協力をえて、一山 典が担当した。

# 目 次

## 序

第1章 位置と歴史的環境..... 1

第2章 調査に至る経過..... 5

第3章 調査成果の概要..... 8

## I 検出遺構

B I 地区..... 8

B II 地区..... 8

C I 地区..... 11

II 出土遺物..... 16

第4章 小結

## 挿図目次

|      |                           |    |
|------|---------------------------|----|
| 第1図  | 阿波国府跡と周辺の遺跡               | 2  |
| 第2図  | 阿波国府跡調査地点周辺地形図            | 7  |
| 第3図  | B I 地区遺構配置図               |    |
| 第4図  | B II 地区グリッド配置図            | 10 |
| 第5図  | C I 地区遺構配置図               | 12 |
| 第6図  | S B - 03 堀立柱建物実測図         | 13 |
| 第7図  | S D - 05 溝実測図             | 13 |
| 第8図  | S D - 06 溝・S A - 03 柱列実測図 | 14 |
| 第9図  | S K - 15 土壙実測図            | 15 |
| 第10図 | S K - 16 土壙墓実測図           | 15 |
| 第11図 | 出土土師器実測図                  | 18 |
| 第12図 | 出土土師器・須恵器実測図              | 19 |
| 第13図 | 出土陶磁器実測図                  | 20 |
| 第14図 | 出土土鍤・砥石・石鍋実測図             | 21 |
| 第15図 | S K - 16 土壙墓出土鉄小刀実測図      | 21 |
| 第16図 | S K - 16 土壙墓出土古銭拓影図       | 21 |

## 図版目次

|      |                      |      |
|------|----------------------|------|
| 図版 1 | 調査地点周辺現況             |      |
| 図版 2 | B I 地区調査地点近景         | 北より  |
|      | B I 地区調査地点           | 南より  |
| 図版 3 | B II 地区調査地点遠景        | 東より  |
|      | B II 地区調査地点          | 東より  |
| 図版 4 | C I 地区調査地点近景         | 北より  |
|      | C I 地区調査地点近景         | 南より  |
| 図版 5 | S D - 05 溝           | 北西より |
|      | S D - 05 溝           | 北より  |
| 図版 6 | S D - 06 溝           | 西より  |
|      | S D - 06 溝           | 西より  |
| 図版 7 | S D - 06 溝東半部        | 北より  |
|      | S D - 06 溝東端部土層      | 西より  |
| 図版 8 | S K - 15 土壙          | 北より  |
|      | S K - 15 土壙土師器出土状態   |      |
| 図版 9 | C I 地区 P - 29 遺物出土状態 |      |
|      | C I 地区 遺物出土状態        |      |
| 図版10 | 出土土師器                |      |
| 図版11 | 出土土師器                |      |
| 図版12 | 出土土師器                |      |
| 図版13 | 出土土師器                |      |
| 図版14 | 出土須恵器・瓦器             |      |
| 図版15 | 出土陶器                 |      |
| 図版16 | 出土陶磁器 (C I 地区)       |      |
| 図版17 | 出土土鍤・石鍋・砥石・丸瓦・平瓦     |      |
| 図版18 | 出土鉄製品                |      |
|      | S K - 16 土壙墓出土古銭     |      |

# 第1章 位置と歴史的環境

吉野川の支流である鮎喰川によって形成された沖積平野の末端付近に位置する徳島市国府町（左岸）・名東町（右岸）一帯は、縄文時代～古墳時代の遺跡から奈良・平安時代の寺院跡・瓦窯跡などの多数の遺跡が存在し、阿波の原始・古代の中心地であった。

代表的なものを列挙すれば、鮎喰川左岸の矢野遺跡、源田遺跡、奥谷1・2号墳、宮谷古墳、矢野古墳、阿波國分寺跡、阿波國分尼寺跡（名西郡石井町）など、鮎喰川右岸の名東遺跡、庄遺跡、筋句山1・2号墳、八人塚古墳、穴不動古墳などという集落跡、銅鐸・銅刺出土地、古墳群、寺院跡等の重要な遺跡が存在し、一部に条里制の残存も認められる。

これらの遺跡の一つとして、鮎喰川左岸の徳島市国府町府中字田渕の大御和神社周辺の沖積地上に「阿波國府跡」が展開したといわれる。

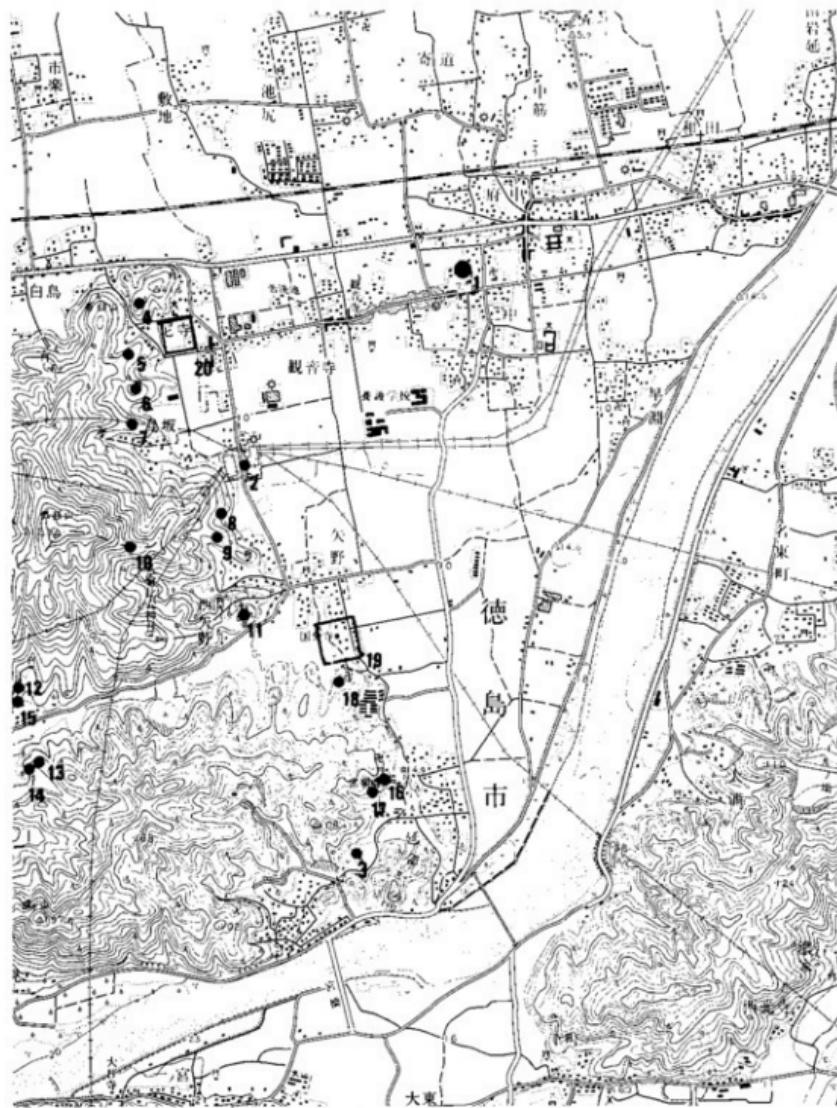
縄文時代には、鮎喰川右岸の南佐古浄水場遺跡（三谷遺跡）から縄文時代後期の土器片、庄町1丁目の庄遺跡－日赤血液センター地区－から縄文時代晚期の土器片が検出されている程度であり、鮎喰川左岸では明瞭な遺跡は発見されていない。<sup>11</sup>

弥生時代には、この沖積平野にも遺跡が展開し、国府町の矢野遺跡（中・後期中心）、名東町の名東遺跡（前期～後期）<sup>12</sup>という二大集落跡が形成される。また、六区画製錠縄文銅鐸3個と中細形銅刺1個が発見された源田遺跡は、「銅鐸文化圏」と「銅刺・銅鉢文化圏」の接点として重要である。<sup>13</sup>

古墳時代における鮎喰川下流域の平野部の遺跡は、前述の矢野遺跡・名東遺跡などから該時代の遺構・遺物が検出されている程度であり、集落跡については今後の調査の進展が俟たれる。一方、古墳については、平野部に続く丘陵一帯に多数築造されているが、沖積平野上に立地する古墳は現状では皆無となっている。奥谷1号墳は全長約50mの前方後方墳（内部主体不明）、奥谷2号墳は全長約18mの積石塚の前方後円墳（内部主体は竪穴式石室2・箱式石棺1）、宮谷古墳は全長約40mの前方後円墳（内部主体不明）<sup>14</sup>であり、前二者は4世紀後半、後者は4世紀後半～5世紀初頭に比定される。矢野古墳は直径約15mの円墳（内部主体は横穴式石室）で、6世紀末～7世紀初頭に比定され、穴不動古墳より若干古く位置づけられる。<sup>15</sup>

奈良時代以降になると、鮎喰川の左岸一帯を中心に、阿波國分寺跡、阿波國分尼寺跡、阿波國府跡、内ノ御田瓦窯跡などが展開する。阿波國分寺跡は大御和神社の南南西約1.5kmの現国分寺を中心に行き、寺域及び中心伽藍の一部を検出している。<sup>16</sup>阿波國分尼寺跡は大御和神社の西方約1.2kmに位置し、方1町半（約158m）の寺域の確認とともに、中心伽藍の一部が検出されている。<sup>17</sup>阿波國府跡は大御和神社を中心に展開したといわれ、昭和57年度の調査では掘立柱建物・溝・土壙などの遺構が検出されたが、国府跡と特定化することはできなかった。内ノ御田瓦窯跡は入田町に所在し、阿波國分寺・尼寺などに瓦を供給したと思われ、奈良時代以降の須恵器も焼かれた内ノ御田須恵器跡なども存在し、該地域の歴史的変遷を知る上で貴重な資料を提供してくれている。<sup>18</sup>

阿波國府跡について、明治41年刊の『徳島縣名勝案内』に「國司廳址」として紹介されたのをはじめ、阿波國府跡の位置推定等が中井伊与太・小川国太郎・秋山泰・藤岡謙二郎・三好昭一郎・美馬弥藏氏などにより発表されている。<sup>19</sup>さらに、福井好行氏は阿波國府跡推定地と周辺部の条里の研



第1図 阿波國府跡と周辺の遺跡

- |           |            |            |             |            |
|-----------|------------|------------|-------------|------------|
| 1 阿波國府跡   | 2 矢野遺跡     | 3 源田遺跡     | 4 尼寺古墳群     | 5 ひびき岩古墳群  |
| 6 日枝神社古墳群 | 7 内谷古墳群    | 8 矢野古墳     | 9 奥谷1号墳     | 10 奥谷2号墳   |
| 11 宮谷古墳   | 12 内ノ御田1号墳 | 13 内ノ御田2号墳 | 14 内ノ御田須恵窯跡 | 15 内ノ御田瓦窯跡 |
| 16 常楽寺跡   | 17 常楽寺瓦窯跡  | 18 瓦谷瓦窯跡   | 19 阿波國分寺跡   | 20 阿波國分尼寺跡 |

究及び地名からの研究、木下良氏は国府と条里に関する米倉説の再検討による阿波国府跡ほかの位置推定などの研究成果を発表している。<sup>109</sup> 米倉二郎氏は最近の研究成果を発表され、国の等級の昇格（阿波の場合は中国から上国へ）によって、国府の規模も変容したと指摘されている。<sup>110</sup>

以上のほかにも、觀音寺跡・西蓮寺跡・常樂寺跡などの寺院跡とともに、瓦谷瓦窯跡・常樂寺瓦窯跡・國分寺瓦窯跡（平窯）などの瓦窯跡などの存在も知られている。<sup>111</sup>

## 註

- (1) 森 敬介「徳島市水道三谷滝過地に於ける原始獨木舟発見の顛末」上・下 『歴史地理』18-1・5 1926. 1・5  
徳島県教育委員会文化課『庄遺跡現地説明会資料』 1983. 1
- (2) 徳島県教育委員会「矢野国府変電所遺跡緊急発掘調査概報 第3次調査』『徳島県文化財調査概報 1976年度』 1978. 3  
徳島市教育委員会（一山 典）「矢野遺跡（第5次）」『徳島市文化財だより』No.1 1978. 9
- (3) 天羽利夫・岡山真知子「鮎喰川下流域における弥生文化の展開－序論－」『徳島県博物館紀要』第5集 1974. 3  
一山 典「名東遺跡調査成果の概要」『徳島市史だより』第4号 1978. 3
- (4) 三木文雄「阿波国源田出土の銅劍銅鐸とその遺跡」『考古学雑誌』第36卷第2号 1950. 7
- (5) 天羽利夫「阿波忌部の考古学的研究」『徳島県博物館紀要』第9集 1978. 3  
川内宏幸「円筒埴輪紹論」『考古学雑誌』第64卷第2号 1978. 9
- (6) 一山 典「奥谷2号墳調査概要」『しふき』No.83 1980. 7
- (7) 天羽利夫「阿波忌部の考古学的研究」『徳島県博物館紀要』第9集 1978. 3
- (8) 天羽利夫「終末期の古墳二基一穴不動古墳・矢野の横穴式古墳－」『徳島県博物館報』No.14 1972. 3
- (9) 徳島市教育委員会「阿波国分寺跡第1次調査概報－1978年度－」『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第4集 1979. 3
- (9) 徳島市教育委員会「阿波国分寺跡第2次調査概報－1979年度－」『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第7集 1980. 3  
徳島市教育委員会「阿波国分寺跡第3次調査概報－1980年度－」『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第9集 1981. 3
- (10) 徳島県教育委員会・石井町教育委員会「阿波国分尼寺跡緊急発掘調査概報」 1971. 3  
徳島県教育委員会・石井町教育委員会「阿波国分尼寺遺跡（第2次）緊急発掘調査概報」 1972. 3
- (11) 徳島市教育委員会「阿波国府跡第1次調査概報－1982年度－」『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第12集 1983. 3
- (12) 立花 博・天羽利夫「徳島市入田町内の御田瓦窯跡調査概報」 1970. 3
- (13) 徳島市教育委員会「内ノ御田須恵窯跡発掘調査概報－1981年度－」『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第11集 1982. 3

- (14) 石毛賢之助「國司廳址」「阿波名勝案内」 1908. 2
- (15) 「國府序址」「徳島縣史蹟名勝天然記念物調査報告」第一輯 1929. 3  
中井伊与太「阿波國府址」「徳島毎日新聞」新年号 1938. 1
- 小川国太郎「國司序とその遺跡」「名東郡史」 1960. 11
- 秋山 泰「國司の序」「徳島県史」第1巻 1964. 3
- 藤岡謙二郎「四国の国府」「国府」 1969. 12
- 三好昭一郎「律令国家の成立と徳島地方」「徳島市史」第一巻 総説編 1972. 10
- 美馬弥藏「阿波の国府址について」「ふるさと阿波」83 1975. 6
- (16) 福井好行「阿波の国府と其附近の条里」「徳島大学学芸学部紀要」社会科学9 1959. 9  
福井好行「阿讃地名考 序説」「阿波の歴史地理」第三 1972. 2
- (17) 木下 良「国府と条里との関係について」「史林」50巻5号 1967. 9
- (18) 米倉二郎「国の昇格と国府の変容」「史林」66巻1号 1983. 1
- (19) 「阿波古瓦」研究グループ(石川重平)「古窯跡および金光明寺・如意寺跡」[阿波古瓦の研究(5)]「徳島教育」166 1961. 9  
「阿波古瓦」研究グループ(石川重平)「白鳳時代・奈良時代 隆善寺、金剛光寺、常楽寺」[阿波古瓦の研究(6)]「徳島教育」167 1961. 10
- 浪花勇次郎「阿波國古瓦拓本集」 1973. 1
- 徳島県博物館「阿波の古代寺院」 1974. 3
- 徳島市教育委員会「歴史時代の徳島市—阿波の古瓦—」 1982. 11

## 第2章 調査に至る経過

阿波国府跡については、前述のごとく、從来より多くの研究成果が発表されているが、主として歴史地理学的分野での位置及び規模等の推定を中心としており、徳島市国府町府中字田瀬に所在する大御和神社を中心に展開したといわれている。

これらの研究成果と昭和57年度の国府中学校建替工事に伴う事前調査及び分布調査の成果等より、「阿波国府跡」の重要性が再認識され、昭和57年度より6ヶ年計画の予定で「重要遺跡確認調査」として、国庫補助を受けて実施することになりました。

第1次調査（昭和57年度）では、大御和神社境内（A地区）を4地区に分け、AII・AIV地区を中心に約300m<sup>2</sup>を対象面積とし、掘立柱建物2棟・溝3条・柱列2・土壙14・井戸1・石組造構1などが検出されたが、部分検出のため、阿波国府跡の遺構と特定できなかった。出土遺物としては、土製品類—土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・土鍤・陶硯など、石製品類—石鍋・石硯など、金属製品類—鉄製品・寛永通寶など、瓦塼類—丸瓦・平瓦などがあり、平安時代末期以降のものが大部分である。

本年度（昭和58年度）の調査は、昨年度の調査成果に関連して、大御和神社周辺の調査を実施することになりました。調査に先立ち、「阿波国府跡発掘調査団」を編成して、昭和59年3月1日から3月31日まで調査を実施した。

### ・ 阿波国府跡調査団構成メンバー

|    |        |                  |
|----|--------|------------------|
| 顧問 | 沖野 舜二  | (徳島県文化財保護審議会会長)  |
|    | 田中 良平  | (徳島市文化財保護審議会委員長) |
|    | 秋山 泰   | (徳島県文化財保護審議会委員)  |
|    | 伊丹 功   | (徳島市文化財保護審議会委員)  |
|    | 岩崎 正夫  | (徳島市文化財保護審議会委員)  |
|    | 藤井 哲四郎 | (徳島市文化財保護審議会委員)  |
|    | 西 敏晴   | (徳島県教育委員会文化課長)   |

調査団長 七條 力 (徳島市教育委員会教育長)

調査副団長 湯浅 明 (徳島市教育委員会社会教育課長)

調査指導 水野 正好 (奈良大学文学部教授)  
田中 琢 (奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長)

調査主任 一山 典 (徳島市教育委員会社会教育課主事)

調査員 河野幸夫（阿波郷土会副会長）  
滝山雄一（徳島市教育委員会社会教育課事務員）  
黒田卓（大阪学院大学OB）

調査補助員 滝山誠二・浦川浩紀・岡秀典・原田康男  
福本雅之・阿部恵美子・板橋トシ子・岩野五十鈴  
岡田イワノ・加納ゆきの・川人久子・武知敏子  
藤岡君子・藤岡シゲ子・前田ハマノ・身野ミヤ子  
山本静香・矢本アサ子・幸田笑子・

指導・助言 阿部里司・天羽利夫・石川重平・岡山真知子  
河野雄次・小林勝美・島巡賢二・新孝一  
菅原康夫・多田寿一・立花博・林慎二  
早瀬隆人・福家清司・松永雅行・松永住美

地元協力者 阿部光延・大葉吉一・勝本義弘・亀山修一  
河野行範・河野良嗣・岸日芳・岸本安治  
高木豊・手塚巖・板東亀三郎・宮本明夫  
宮本忠夫

事務局  
局長 錆田祐輔（徳島市教育委員会社会教育課課長補佐）  
次長 山野孝行（徳島市教育委員会社会教育課主幹兼庶務係長）  
幹事 大津衛（徳島市教育委員会社会教育課文化振興係長）  
局員 横谷千代美（徳島市教育委員会社会教育課主事）  
切幡保子（徳島市教育委員会社会教育課課員）

（順不同・敬称略）

調査にあたりましては、奈良大学の水野正好先生、奈良国立文化財研究所の田中琢先生をはじめ、地元の研究者の方々にも種々の御指導・御助言をいただきました。記して感謝の意を表する次第です。

また、土地所有者の勝本義広・河野行範・宮本明夫・宮本忠夫の各氏をはじめ、河野良嗣氏にはアレハブ仮設用地の提供など、地元の方々には真摯な御援助・御協力と御理解をいただきました。

なお、御芳名をいちいちあげられませんでしたが、多くの方々の御援助・御協力をいただきました。併せて感謝の意を表する次第です。



第2図 阿波國府跡調査地点周辺地形図  
A I ~ A IV A I ~ A IV地区 (第1次調査) B I BII地区 B II B III地区 C I C II地区

### 第3章 調査成果の概要

本年度の調査（第2次調査）は、昨年度の調査の継続調査として、大御和神社境内（A地区）で検出された遺構（掘立柱建物ほか）の確認調査を実施する予定であったが、諸般の事情等により、大御和神社周辺部の調査を実施した。

今回の調査では、大御和神社東側の阿波国府跡の東政庁跡と推定されている千福寺（大坊）の東側の調査地点をB I地区、北側の調査地点をB II地区、大御和神社の北西側の調査地点をC I地区と呼称した。さらに、3m×3mのグリッドを設定して、B I地区は南よりA～N、西より1～5、B II地区は北よりA～C、東より1～15、C I地区は北よりA～J、西より1～5とし、それぞれA 1・B 1グリッドなどと呼称した。

調査は3m×3mのグリッド法を基本として、トレンチ法をも併用して実施し、調査対象面積は約300m<sup>2</sup>であり、B I地区は約60m<sup>2</sup>、B II地区は約90m<sup>2</sup>、C I地区は約150m<sup>2</sup>の範囲で実施した。

#### I 検出遺構

今回の発掘調査により検出された遺構は、掘立柱建物1棟・溝3条・柱列1・土壙(土壙基含む)4などとともに大小のピットがあげられる。

#### B I 地区

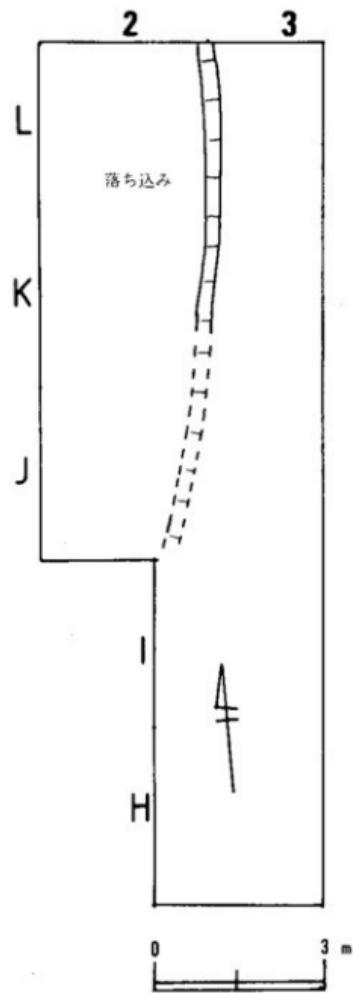
調査区の北西端のJ 2～L 3グリッドにかけて、近世以降の陶磁器片などが混在した落ち込みが検出された以外は、中世以降の土器片などが散在する遺物包含層が検出された程度である。なお、調査区の南端部については、明治6年の千福寺火災の際の擾乱が顕著に認められた。

本地区の基本層序については、表土層（暗褐色土）は約20cm、第2層（暗黄褐色粘質土）約25cm、第3層（暗褐色粘質土）約20cm前後、第4層（黒褐色土—落ち込み）約20～30cm、第5層（黒灰褐色土—遺物包含層）は約20cm前後であり、表土下約90cmで小礫混在の暗灰色砂層に達している（海拔約6.6m）。

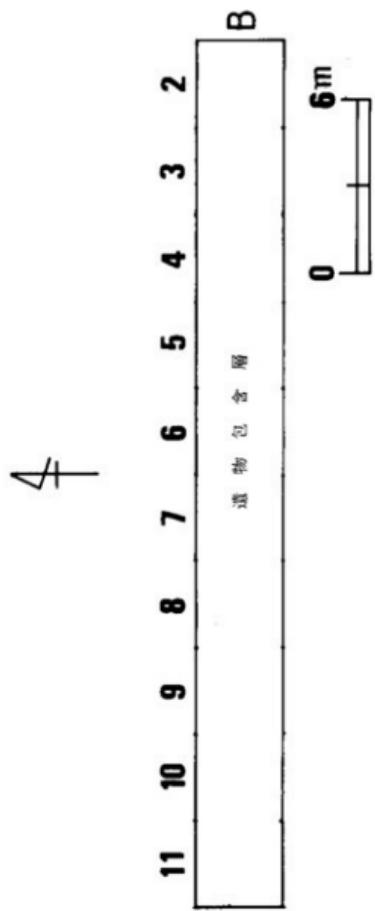
#### B II 地区

本地区についても、B I地区と同様に明瞭な遺構の検出には至らず、調査区全般にわたり、土師器小片を混在する約20cm前後の厚さを有する遺物包含層が検出された程度である。

本地区の基本的層序は、約10cmの表土層（暗褐色土）、第2層（暗褐色粘質土—遺物包含層）約20cm、第3層（淡灰色砂質土）約35cm前後であり、表土下約75cmで小礫混在の淡灰色砂層に達している（海拔約6.6m）。



第3図 BI地区造構配図



第4図 BII地区アリット配面図

## C I 地 区

掘立柱建物1棟・溝3条・柱列1・土壌(土壌墓含む)4などとともに大小のビットが検出されている。

### 掘立柱建物

S B-03は、調査区の中央部やや北よりのC 2～C 4グリッド、D 2～D 4グリッドを中心に検出されたものである。現状では、東西2間×南北2間で西側に延びる可能性を有する東西棟建物である。柱間心々距離は東西(桁行)約8尺(約2.4m)、南北(梁行)約8尺(約2.4m)で、柱穴はいずれも径約30cm前後、深さ約20～40cm前後の平面形が不整円形プランを呈する。柱痕の遺存している柱穴も存在していた。

### 溝

S D-05は、調査区の中央部やや北よりのC 3～C 4グリッドを中心に検出された東西溝である。幅約1.45m、深さ約20cm前後で長さ約5.5m分が検出され、東側にさらに延びるものと思われる。

S D-06は、調査区の北端部のB 2～B 4グリッドにかけて検出された東西溝である。上部に小礫を含んでおり、幅約1.3m、深さ約30cm前後で一部(約9m分)のみの検出であり、東側及び西側に続くものと思われる。第1次調査で検出されたA IV地区のS D-02などと同様に建物などに付属する遺構と思われる。

S D-07は、調査区の南西端のH 2～H 3グリッドにかけて検出された東西溝である。幅約40cm、深さ約10～20cm前後で長さ約4m分が検出されたのみで、西側にさらに延びるものと思われる。

### 柱 列

S A-03は、調査区の最北端にS D-06に並行して検出された東西方向に走る柱列である。柱間心々距離は約6尺(約1.8m)で、柱穴は径約20cm前後、深さ約10cm前後の平面形が円形状プランを呈する。東側及び西側に延びるものと思われ、北側は道路下に入る所以詳細は不明であるが、建物の一部を構成していた可能性が大である。

### 土 塚 (土 塚 墓)

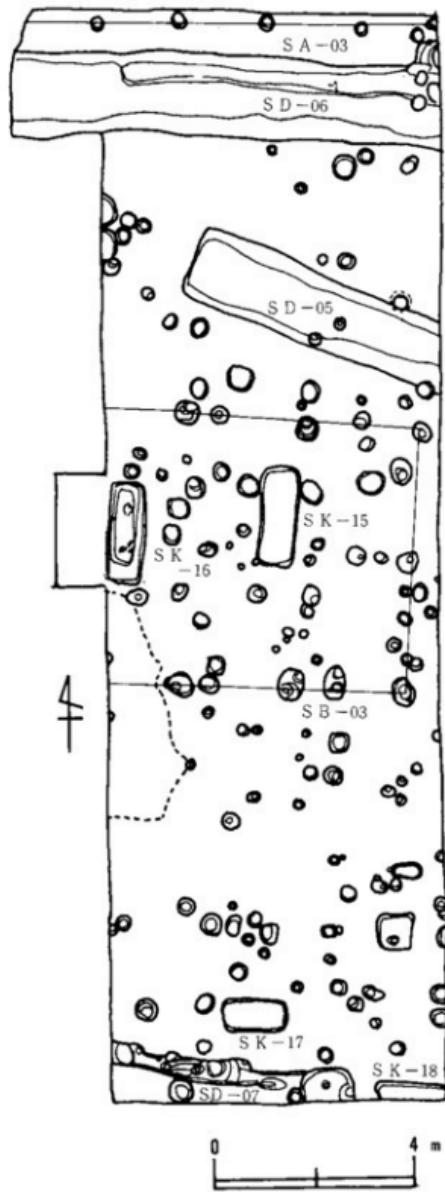
S K-15は、E 3グリッドの北東隅付近に検出されたもので、長径約1.9m×短径0.7m、深さ約30cmを測る不整隅丸方形形状プランを呈する。

S K-16は、E 2グリッドの北東隅付近に検出された土壌墓で、長径約1.96m×短径約86cm、深さ約20cmの隅丸長方形形状プランを呈する墓壙を掘り、さらに、長径約1.6m×短径約50cm、深さ約20cmの土壌を掘り、遺体を埋納している。頭位の方向は、所謂北枕となっている。頭蓋骨の一部と大腿骨の一部などが遺存していたが、腐食が顕著で性別については不明確である。

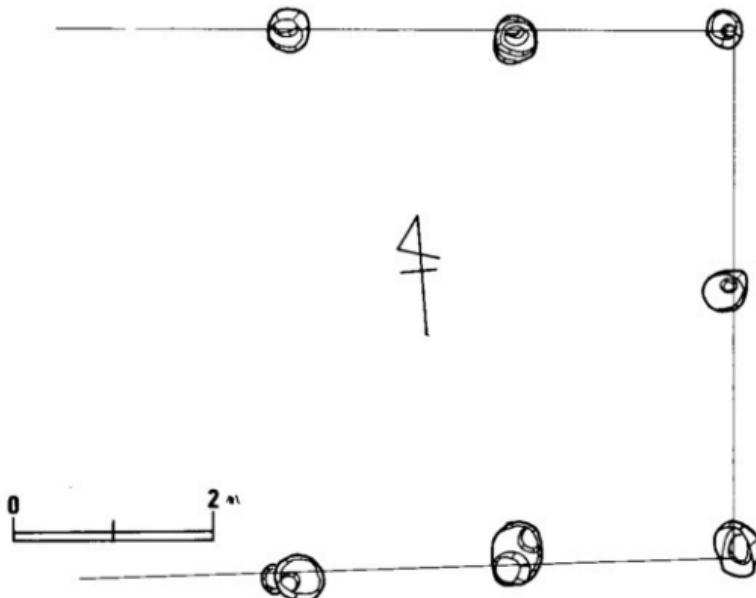
S K-17は、長径約1.3m×短径約65cm、深さ約10cm前後の隅丸長方形形状プランを呈する。

S K-18は、H 4グリッドの南東隅に一部検出されたもので、詳細については不明である。

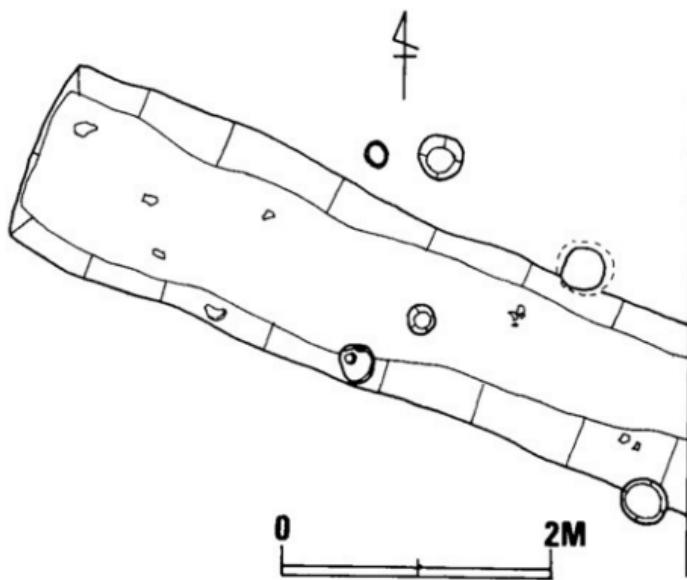
大小のビットは、径約10～30cm、深さ約10～30cmで円形状プランを呈するものと橢円形状プランを呈するものとに大別される。



第5図 C I 地区遺構配置図

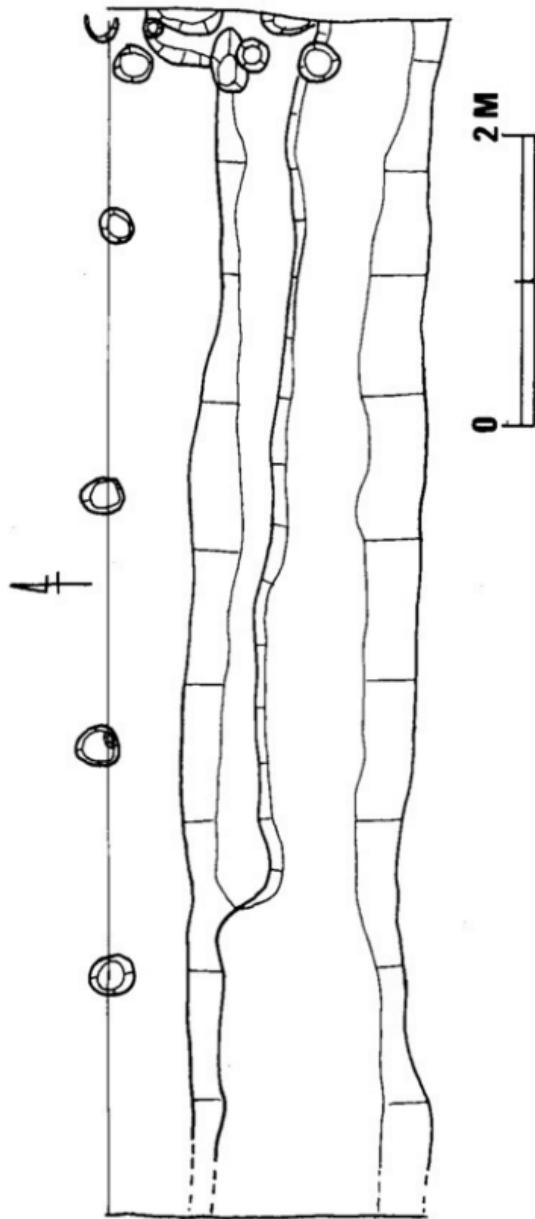


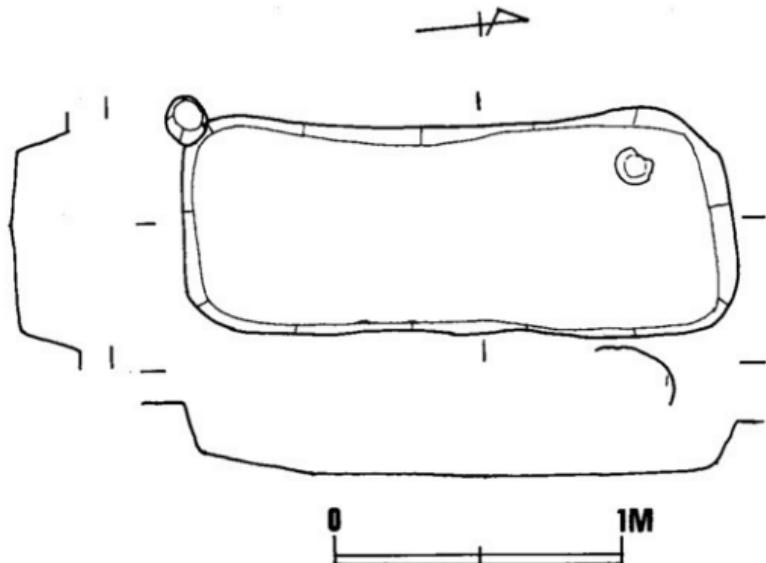
第6図 SB-03概立柱実測図



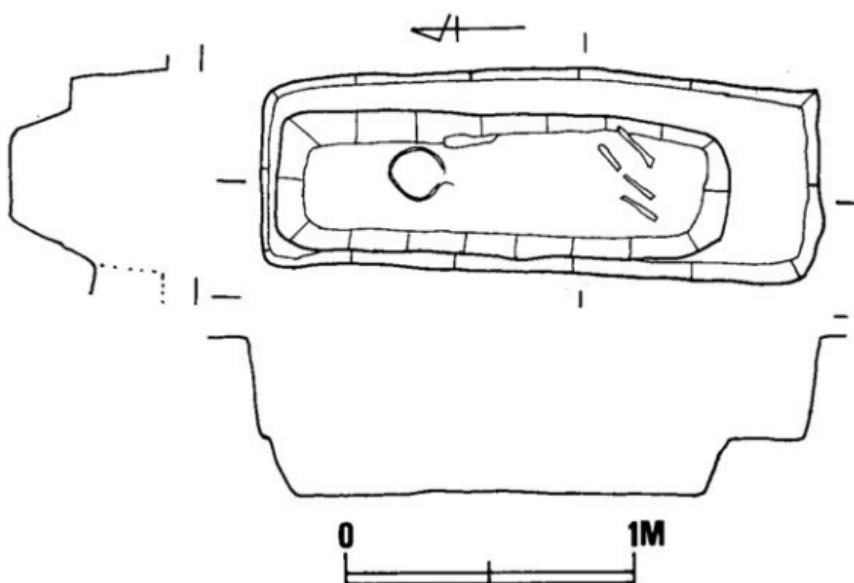
第7図 SD-05溝実測図

第8圖 SD-06號 SA-03柱列實測圖





第9図 SK-15土壤実測図



第10図 SK-16土壤実測図

## II 出土遺物

今回の発掘調査により検出された出土遺物としては、土製品類・石製品類・金属製品類とともに瓦塼類などがあげられる。

### (1) 土 製 品 類

土製品類としては、土師器・須恵器・瓦器・陶器・磁器・土鍾などが存在し、土師器以外は器種・出土点数は極少である。

#### 土 師 器

土師器はC I 地区を中心に調査区全体より検出されており、出土遺物の整理が完了していないので詳細は不明であるが、供膳形態の环・皿の二器種を中心に若干の高环・塊などとともに、煮沸形態・調理形態の甕などが若干数認められる。

环については、平底で高台が付かないもの（A類）が大部分であり、高台を貼り付けるもの（B類）高台を削り出すもの（C類）とはほとんど検出されていない。

皿については、平底で高台が付かないもの（A類）、高台を貼り付けるもの（B類）とに大別される。

塊については、出土点数は極少で大部分が小破片であるが、丸底のもの（A類）と高台を貼り付けるもの（B類）とに大別されるものと思われる。

环と皿の器種分けは困難であるが、器高3cm前後を規準にしておきたい。なお、环・皿ともに底部の形状、口径の大きさや調整方法の相異などより若干の細分化が可能と思われる。

土師器の出土遺構としては、SK-15・SK-16などの土塼（土塼墓）を中心に、SB-03の掘立柱建物、SA-02の柱列、SD-05・SD-06などの溝から若干数検出されている。また、大小のピットの大部分からも検出されており、特にP-20などからは比較的多量に発見されている。

#### 須 惠 器

SD-05・SD-06、SK-15・SK-16などから若干数検出されている以外は、大部分が小破片である。

#### 瓦 器

大部分が小破片であり、全体の形狀を復元するのは困難なものが多いが、若干数の塊（高台付含む）と思われるものが、SD-06、SK-16などから若干数検出されている。

#### 陶 器

調査区全般の表土層を中心として、国産の陶器類（中世以降中心）が出土している。SD-05より綠釉陶器が出土している。

#### 磁 器

青・白磁片が出土しているが、出土点数は極少であり、いずれも小破片である。青磁としては碗と壺と思われる器種が存在し、白磁としては碗と思われるものがあり、いずれもSD-06を中心して検出されている。

## 土 錘

4点のみの出土であり、いずれも管状土錘である。C I 地区の S D - 05・P - 02などより検出されている。大小の二つに大別される。

### (2) 石 製 品 類

石製品類としては、石鍋片1点、砥石1点のみの出土である。

#### 石 锅

B II 地区の B 3 グリッドの第2層から検出されたもので、口縁部直下に鋸が固っている口縁部の破片である。第1次調査で発見されたものと同様の形状を呈すると思われ、鋸は比較的厚くて大きく、外に張り出すように削り出され、断面形は正台形を複数重ねた形状を呈している。石材は滑石製と思われる。

#### 砥 石

C I 地区の P - 15より検出されたもので、長さ約6.2cm、幅約2.7cm、最大厚約1.6cmを測り、表裏及び両側面などに研磨痕が認められる。

### (3) 金 属 製 品 類

金属製品類としては、SK - 16より検出された鉄小刀（長さ約20cm、幅約4cm、厚さ約4mm）などの鉄製品とともに、SK - 16の上面付近から6枚重ねの元豊通寶などが検出されている程度である。

### (4) 瓦 塼 類

瓦塼類としては、C I 地区を中心に丸瓦・平瓦の小破片が若干数検出されている。

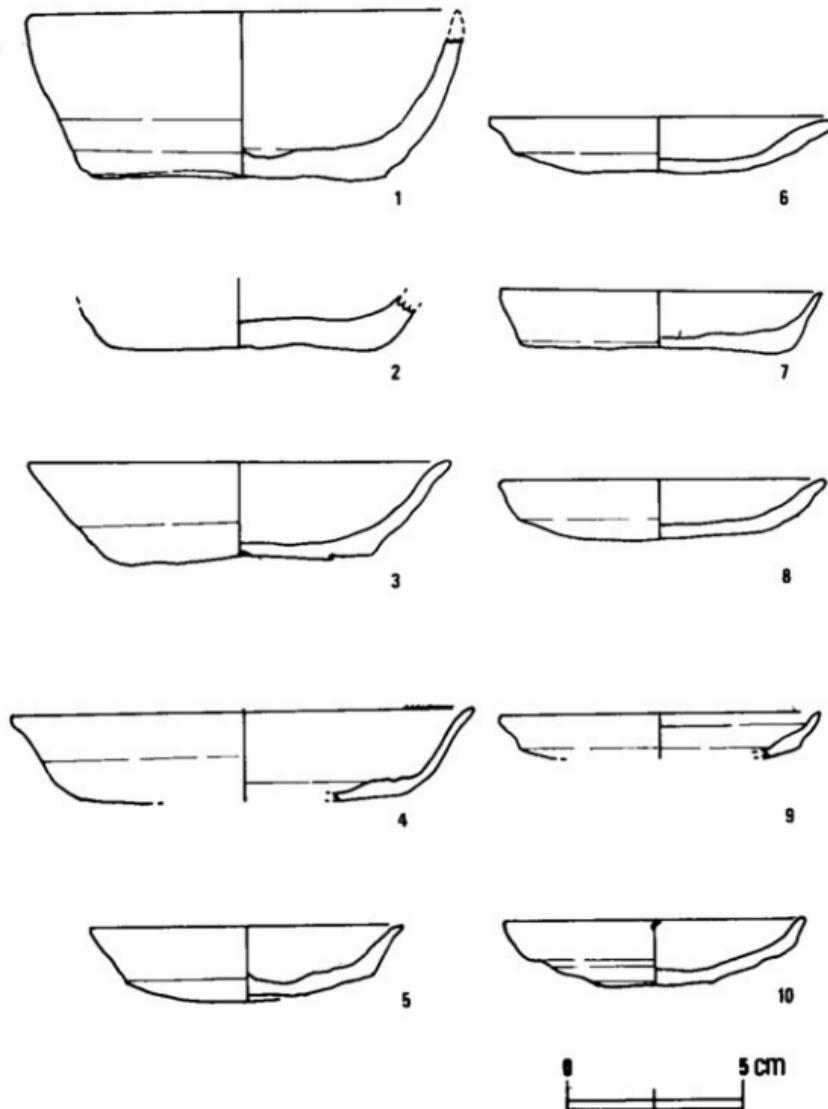
#### 丸 瓦

小破片ばかりで、全体の形状を知るものは検出されていないが、C I 地区の P - 15より凹面に比較的細かい布目痕を有するものが出土している。

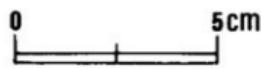
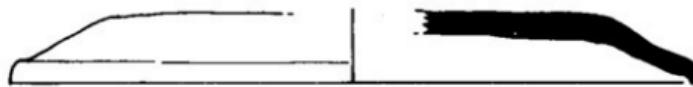
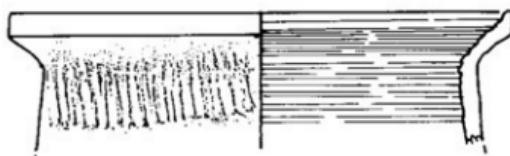
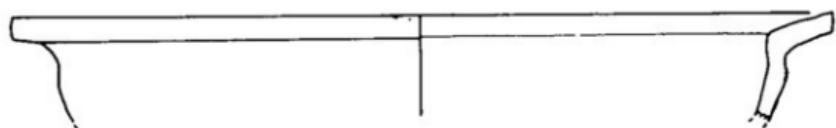
#### 平 瓦

小破片が大部分で、全体の形状を知るものは検出されていないが、いずれも、凸面に繩叩目文を配し、凹面には布目痕を有している。C I 地区の P - 08・P - 20・P - 121などから出土している。

検出遺構の主要な遺物組成について簡単に紹介してみると、SB - 03は土師器、SD - 05は土師器（朱塗土器含む）・須恵器・綠釉陶器、SD - 06は土師器・須恵器・陶器・白磁、SP - 07は土師器・瓦器、SK - 15は土師器・須恵器・土錘・瓦器、SK - 16は土師器・須恵器・瓦器・鉄小刀、SK - 17・SK - 18は土師器・瓦器、SA - 02は土師器・瓦器、P - 15は土師器・須恵器・陶器・磁器・砥石・丸瓦、P - 16は土師器・須恵器、P - 20は土師器（朱塗土器含む）・須恵器・陶器・平瓦、P - 35は土師器・須恵器・瓦器などである。その他の大小のピットは、土師器を中心に、須恵器・瓦器小片などが加わる遺物組成を呈するものが大部分である。



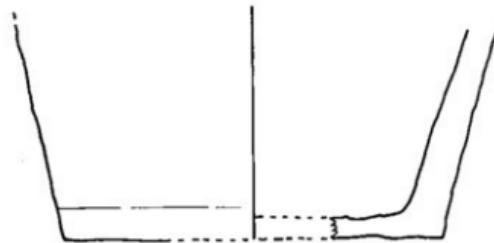
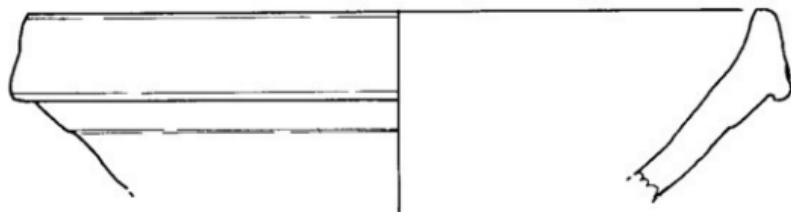
第11図 出土土師器実測図



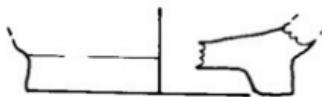
第12図 出土土師器・須恵器実測図



0 5cm

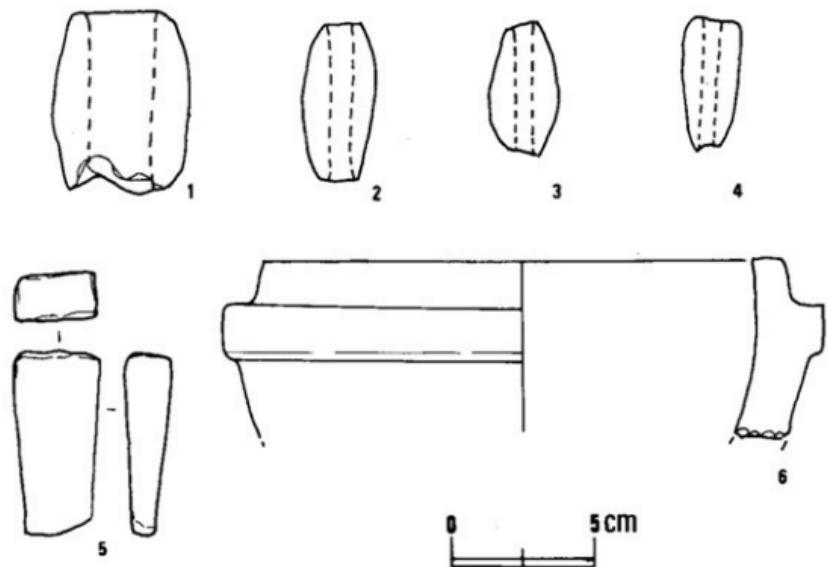


0 10cm

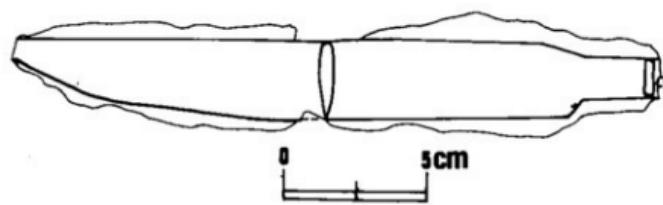


0 5cm

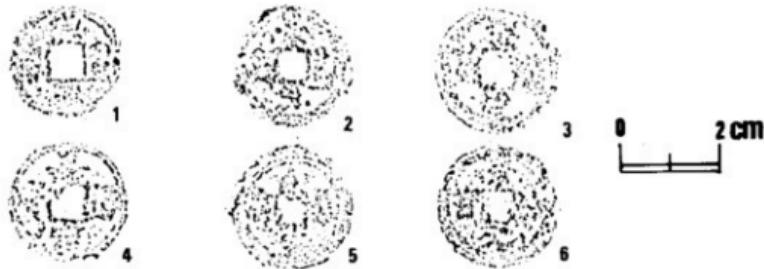
第13図 出土陶磁器実測図



第14図 出出土錘・砸石・石鎬実測図



第15図 SK-16土壤墓出土鐵小刀実測図



第16図 SK-16土壤墓出土古銭拓影図

## 第4章 小 結

今回の調査目的は、阿波國府跡の政庁跡の検出であったが、阿波國府跡と特定できる遺構の検出には至らなかった。ここでは、今回の発掘調査の成果等に関連した問題点をあげて、小結としたい。  
なお、国府・国衙・政庁等の概念については、山中敏史氏の指摘に従っておきたい。<sup>(1)</sup>

### ① 立地条件に関する諸問題

国府跡の立地については、藤岡謙二郎氏は①内陸盆地に位置するもの—4つに細分、②海岸平野または河口付近に位置するもの—4つに細分、③湖上交通にめぐまれた地点に位置するものという9条件を考えられている。発掘調査例を中心に全国的にみてみると、内陸または臨海に近く、一方あるいは数方に可航河川<sup>(2)</sup>を有する位置が多く選定されたようである。この点で、河川の持つ意味は大なるものが存在したと思われる。

阿波國府跡については、臨海または河口の沖積三角州や海岸段丘という立地条件が与えられ、大御和神社周辺を中心に展開したとすれば、海拔7m前後となり、阿波國分寺跡・阿波國分尼寺跡より約3~4m低い立地条件を示している。

### ② 府城及び位置に関する諸問題

阿波國府跡については、従来の歴史地理学的研究の成果より、大御和神社が西政庁跡、道路をはさんで東側の千福寺（千坊）が東政庁跡と考えられてきた。<sup>(3)</sup>また、米倉二郎氏によれば、初期の阿波國府の政庁—一条里地割に一致する—が大御和神社境内を中心とし、後期の阿波國府の政庁—正方位地割と一致する—が国鉄徳島本線府中駅の西方約200mの地点とされ、初期（中国の時代）は6町四方、後期（上国の時代）は8町四方になったことが指摘されている。<sup>(4)</sup>

面積的に非常に狭い範囲の調査であるため再検討の余地を有しているが、第1次調査及び今回の調査とともに周辺部の発掘調査・分布調査等の成果を考慮してみると、阿波國府跡の政庁が大御和神社よりさらに西方に位置していた可能性も有し、今後の研究課題である。

### ③ 国衙及び政庁の建物等に関する諸問題

国府の建物については、文献面より、国司館舎をはじめ、税所・大帳所・調所・朝集所・健児所・国掌所・田文所・公文所・辨済所等の官舎とともに、学館・倉などの存在が指摘されている。<sup>(5)</sup>

全国の国府跡の発掘調査等による考古学的成果より、政庁の建物には正殿（前殿）・後殿・東脇殿・西脇殿・東門・西門・南門・北門等とともに雑舎的な建物である倉庫などの存在が知られている。<sup>(6)</sup>

これらの調査成果より、建物の配置形態は個々の遺構の成立年代は相異しているが、正殿の東西両翼に脇殿を配し、後殿を加え、これらの建物を築地塀で取り囲んで中郭を形成するという原則の存在も指摘されている。さらに、その変遷過程は掘立柱建物から礎石建物へ、正殿と東・西脇殿のみの構成から後殿その他を加えて機能が拡大化していくことも指摘されている。<sup>(7)</sup>

阿波國府の場合も、同様の変遷過程をたどるものと思われるが、今回の調査により検出された掘立柱建物は規模も小さく、政庁の建物と特定することができなかつたので、詳細については今後の調査成果に期待したい。

#### ④ 条里地割に関する諸問題

阿波国分寺跡・阿波国分尼寺の場合は、条里の東西・南北地割との密接な関連が指摘できる。

阿波国府跡については、前述のごとく、府城等について条里地割との一致などが歴史地理学的研究成果より指摘されている。<sup>16)</sup>

大御和神社の周辺における条里の南北地割については、真北より西へ約11度ふれており、阿波国分寺跡・阿波国分尼寺跡などの周辺と同一であるが、大御和神社の東方では真北より西へ約15度ふれる条里地割が存在している。時期・地域差により条里地割の相異が存在したと思われ、阿波国府の政庁位置などを策定する上で注意される。

#### ⑤ 検出遺構に関する諸問題

検出遺構としては、前述のごとく、掘立柱建物・溝・柱列・土壙（土塙墓）・大小のピットなどがあげられる。

**掘立柱建物**のS B-03は、西側が未確認であるので詳細は不明である。柱穴の規模・構造などから小規模なもので、倉庫などの雜舎的な建物と考えられるが、政庁に関連する遺構と特定することはできなかった。年代的には、柱穴内出土の土器などより、鎌倉時代初頭ごろ（12世紀末）に比定されるものと思われる。S D-06との関連も考えられる。

溝については、建物に付属する可能性を有すると思われるS D-05・S D-06などがある。いずれも、部分的な検出のため詳細は不明であるが、後者は特に建物を画する溝の可能性を有しており重要である。

S D-05については、平安時代前期（9世紀中頃）、S D-06については、鎌倉時代前期（13世紀前半頃）以降の所産と思われる。

**柱列**としてのS A-02については、S D-06と密接に関連すると思われるが、大部分が道路下に入るため、今後の研究課題である。

**土塙（土塙墓）**については、SK-15・SK-16・SK-17・SK-18などが存在する。

SK-16は、人骨が埋納された土葬墓であり、該期の墓制の一端を知る上で重要である。SK-15は平安時代末～鎌倉時代初頭、SK-16は平安時代末～鎌倉時代初頭、SK-17・SK-18は出土遺物は小破片がほとんどであるが、鎌倉時代の所産と思われる。

#### ⑥ 出土遺物に関する諸問題

出土遺物としては、前述のごとく、土製品類－土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・土錘等、石製品類－石鍋・砥石等、金属製品類－鉄小刀等が検出されている。

**土師器**としては、前述のごとく、壺・皿などの器種を中心に、若干数の塊・甕などが検出されている。年代的には、S D-05から出土しているもの以外は、大部分が平安時代末期以降に比定されるものと思われる。

**須恵器**については、前述のごとく小破片が大部分であるが、年代的には、S D-05から検出された蓋は平安時代前期に比定され、大部分は平安時代の所産と思われる。

**陶磁器**については、国産の陶磁器類が大部分であり、年代的にも鎌倉時代以降に比定されるものが多い。S D-05からは綠釉陶器片が出土しており、年代的にも平安時代前期に比定されると思われる、宮殿・官衙・寺院などにおける祭儀に使用された可能性を有する使用形態の面などで注意される。

## ⑦ 存続年代に関する諸問題

阿波国府については、今回の検出遺構が政庁の建物あるいは関連の遺構と特定することができなかつたので不明確であるが、掘立柱建物・溝・柱列などについては、阿波国府の存続年代を知る上で重要な遺構である。

全国の国府跡の調査例からすれば、国府は3～5時期の変遷を有するものが多く、存続年代も奈良時代～平安時代に比定されている。阿波国府の場合は、米倉二郎氏により2時期に大別されることが指摘されているが、今後の研究課題と思われる。

## 註

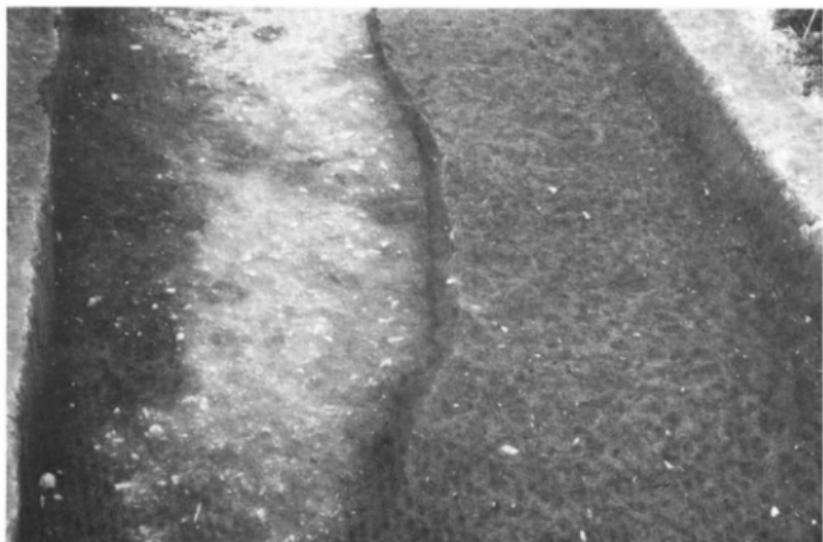
- (1) 山中敏史「国府・都衙跡調査研究の歴史」『仏教芸術』124 1979. 5
- (2) 藤岡謙二郎「国府の地理的・地形的位置」『国府』1971. 12
- (3) 木下 良「国府と条里との関係について」『史林』50巻5号 1967. 9
- (4) 米倉二郎「国の昇格と国府の変容」『史林』66巻1号 1983. 1
- (5) 丸茂武重「国府・都家の建物について—律令制における—」『国学院雑誌』第62巻第9号 1961. 9
- (6) 防府市教育委員会「周防の国衙」 1967. 3  
宮城県教育委員会「多賀城跡 昭和44～57年度発掘調査概報」 1970. 3～1983. 3  
松江市教育委員会「出雲国府跡発掘調査概報」 1971. 3  
酒田市教育委員会「城輪柵跡第二次調査概要」 1971. 3  
倉吉市教育委員会「伯耆国府跡発掘調査概報（第3次）～（第6次）」 1976. 3～1979. 3  
久留米市教育委員会「筑後国府跡（I）・（II）」『久留米市文化財調査報告書』第12・13集 1976. 3・1977. 3  
滋賀県教育委員会「史跡近江国衙跡発掘調査報告」『滋賀県文化財調査報告書』第6集 1977. 3  
佐賀県教育委員会「肥前国府跡I（第1次～第3次）」 1978. 3  
栃木県教育委員会「下野国府跡I・II・III」『栃木県埋蔵文化財調査報告書』第30・35・42集 1979. 3・1980. 3・1981. 3
- (7) 松本長三郎「高瀬遺跡・じょうべのま遺跡をめぐって 第1章 建築よりみた二つの遺跡」『富山県埋蔵文化財調査報告書』III 1974. 3
- (8) 福井好行「阿波の国府と其附近の条里」『徳島大学学芸学部紀要』社会科学9 1959. 9  
木下 良「国府と条里との関係について」『史林』50巻5号 1967. 9  
米倉二郎「国の昇格と国府の変容」『史林』66巻1号 1983. 1

調査地点周辺現況





B I 地区調査地点近景 北より



B I 地区調査地点 南より



B II 地区調査地点近景 東より



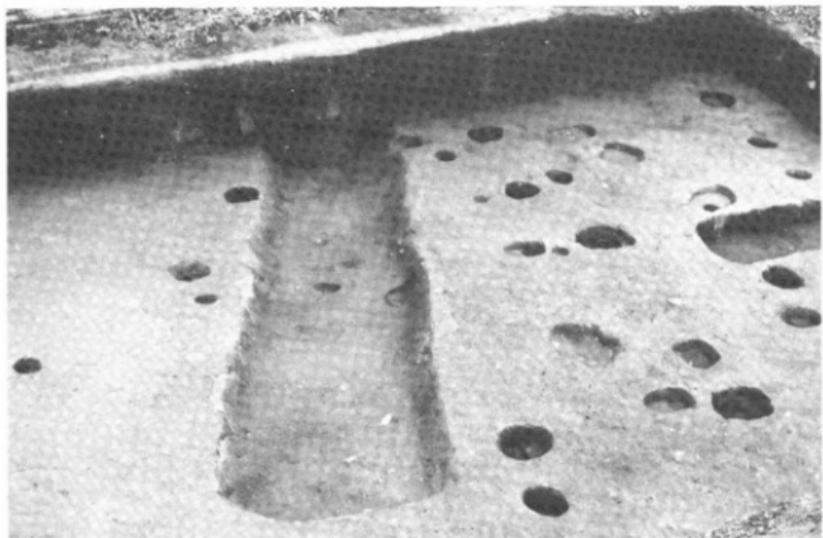
B II 地区調査地点 西より



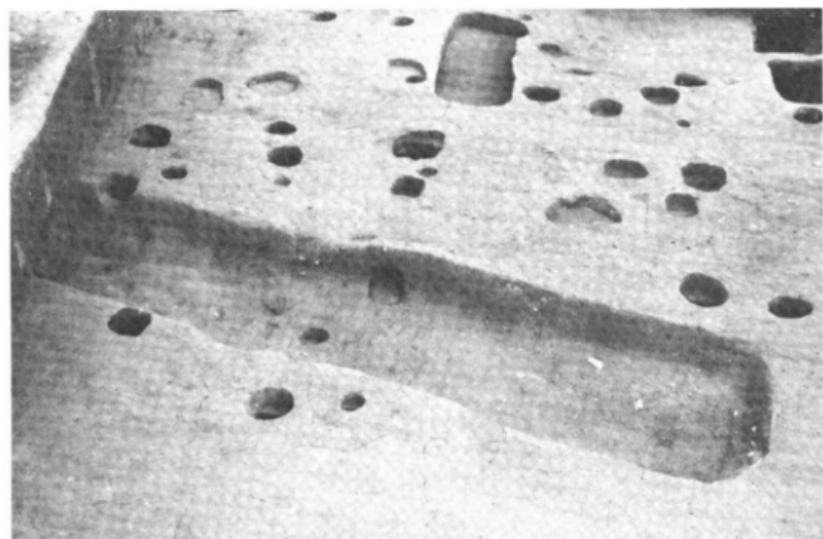
C I 地区調査地点近景 北より



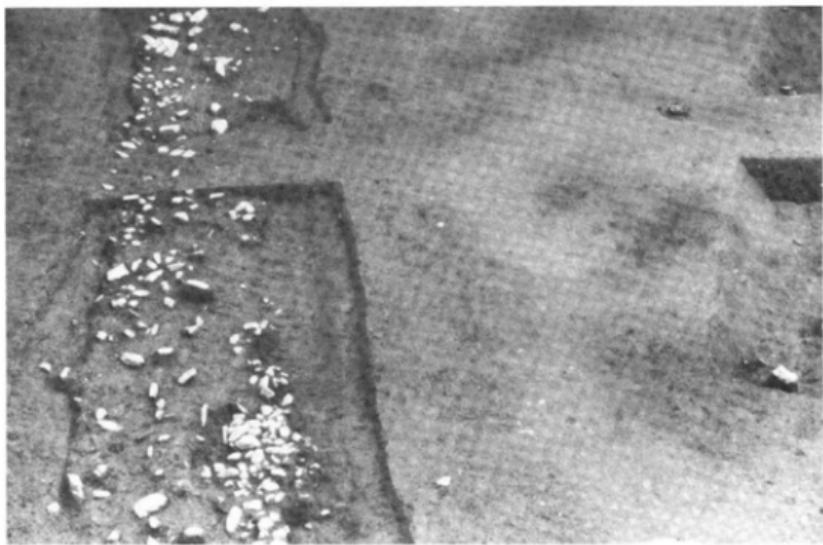
C I 地区調査地点近景 南より



SD-05 溝 北西より

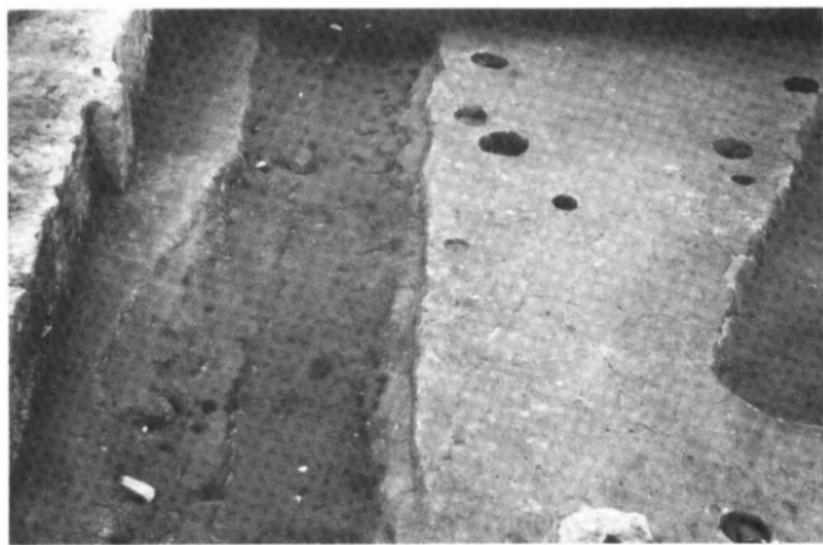


SD-05 溝 北より



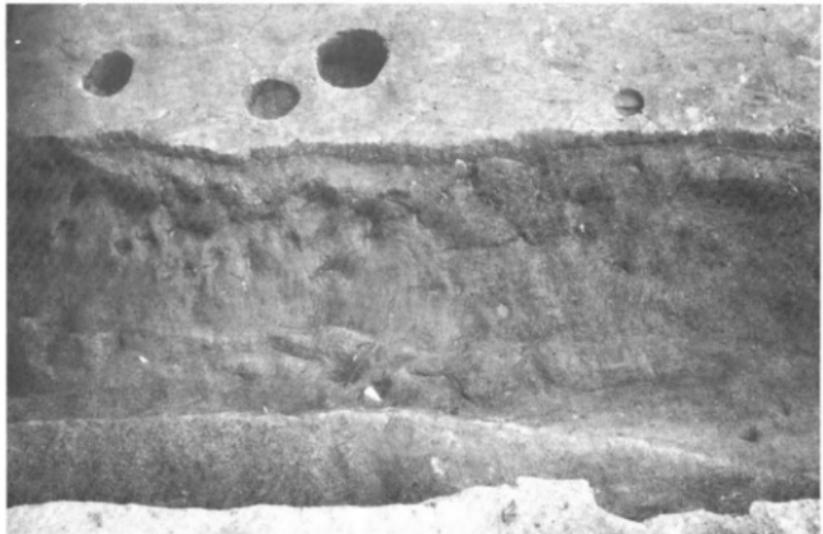
S D-06 溝

西より



S D-06 溝

西より



S D - 06溝東半部 北より



S D - 06溝東端部土層 西より



SK-15 土壌 北西より



SK-15 土壌土篩器出土状態



C I 地区 P -29 遺物出土状態



C I 地区遺物出土状態



出土土器

- |                   |                   |               |               |
|-------------------|-------------------|---------------|---------------|
| 1 C I 地区 S D - 06 | 2 C I 地区 S D - 06 | 3 C I 地区 P 20 | 4 C I 地区 P 20 |
| 5 B II 地区         | 6 C I 地区          | 7 C I 地区      | 8 C I 地区      |
| 9 B II 地区         | 10 B II 地区        |               |               |



1



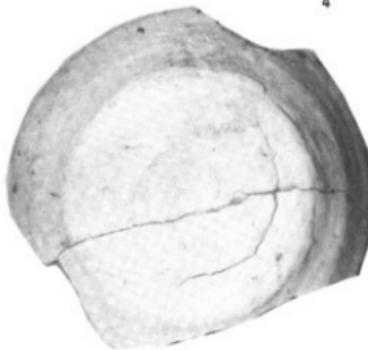
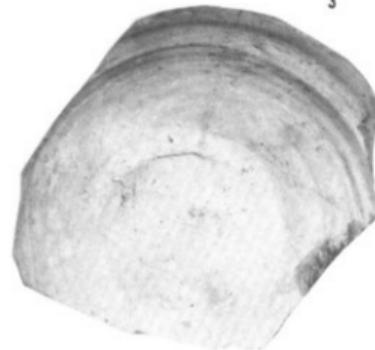
2



3



4



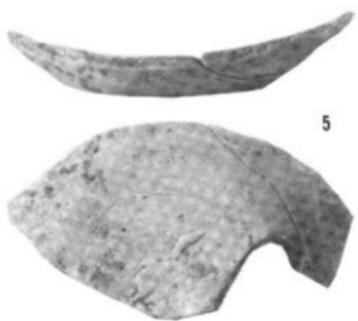
出土土器

1 C I 地区 - SK - 15

2 C I 地区 P - 20

3 C I 地区 SD - 05

4 C I 地区



5



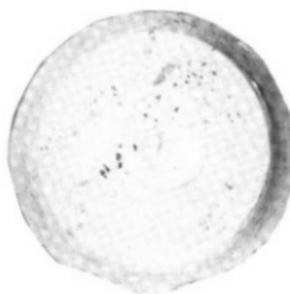
6



7



8



9



10

出土土器

5 C I 地区 P - 20

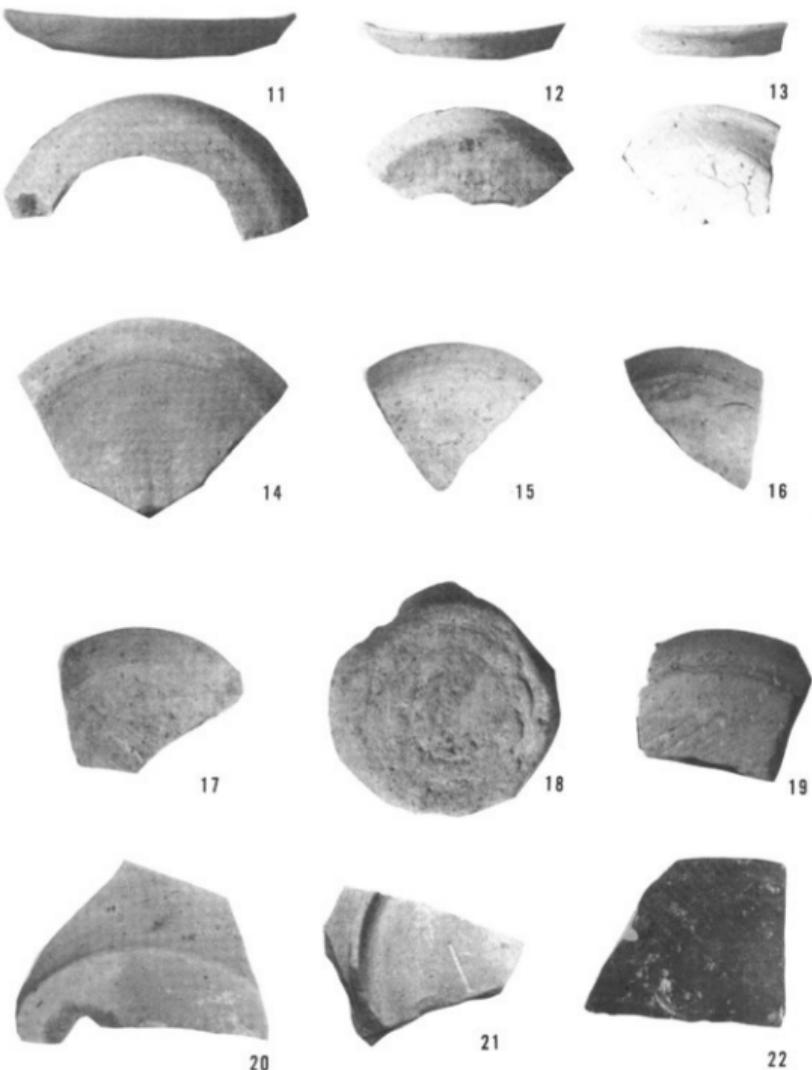
8 C I 地区 P - 21

6 C I 地区 P - 20

9 C I 地区 P - 21

7 C I 地区 P - 30

10 C I 地区 P - 29



出土土筛器

11·12 C I 地区 P-20

13 C I 地区 P-35

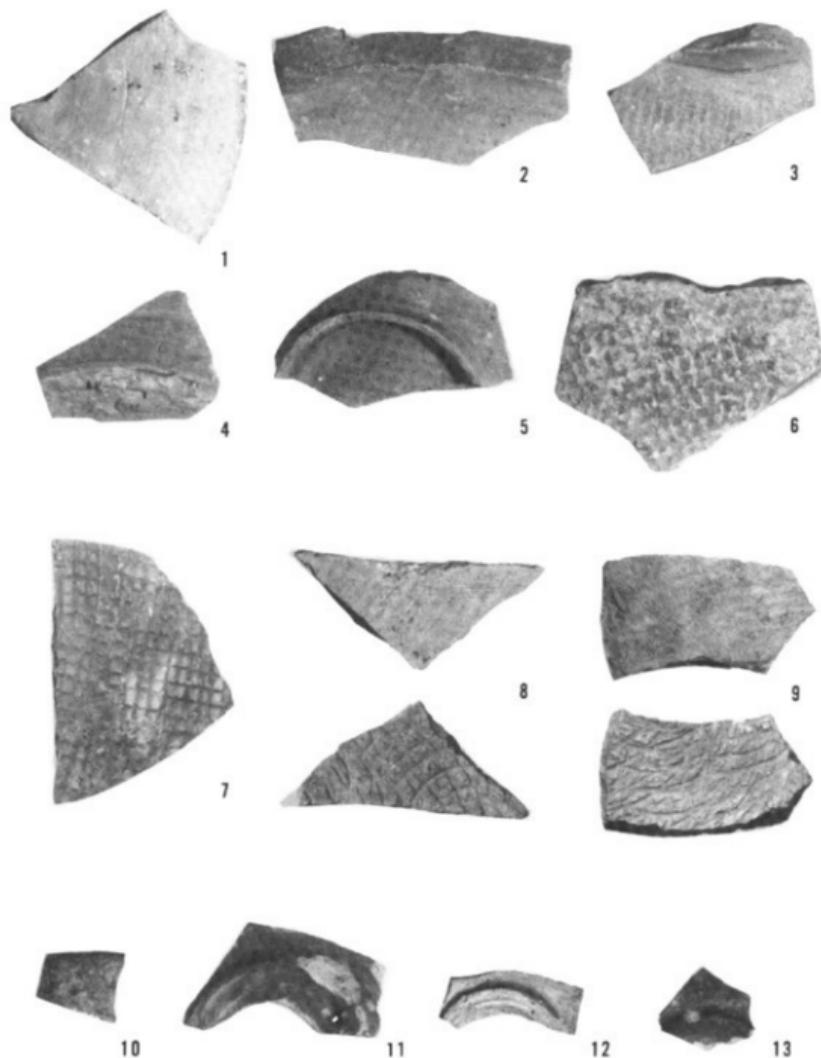
14 C I 地区

15·20 C I 地区 P-30

17·18·21 C I 地区 S K-16

19 C I 地区

22 C I 地区 (黑色土器)



出土 陶 器・瓦 器

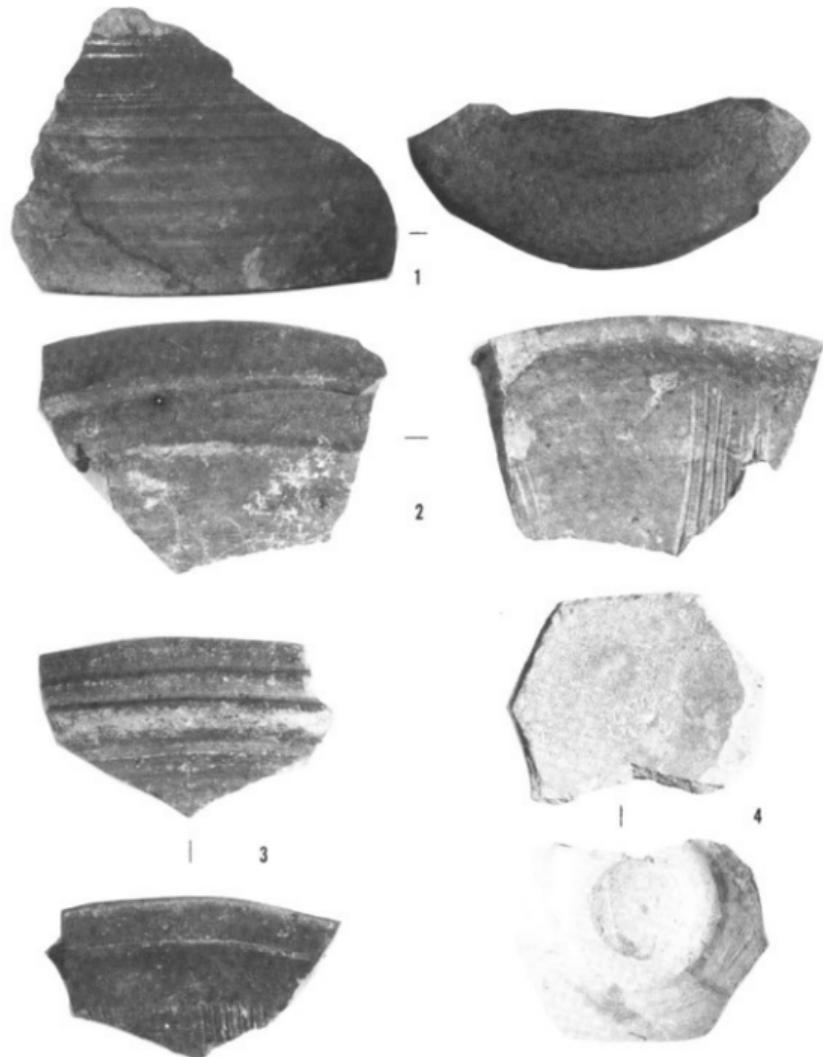
1~9 陶 器 1 C I 地区 SD-05 2 C I 地区

3·4·6~7 C I 地区 P-15

10·11 C I 地区 SD-06

10~13 瓦 器

12·13 C I 地区 SK-16



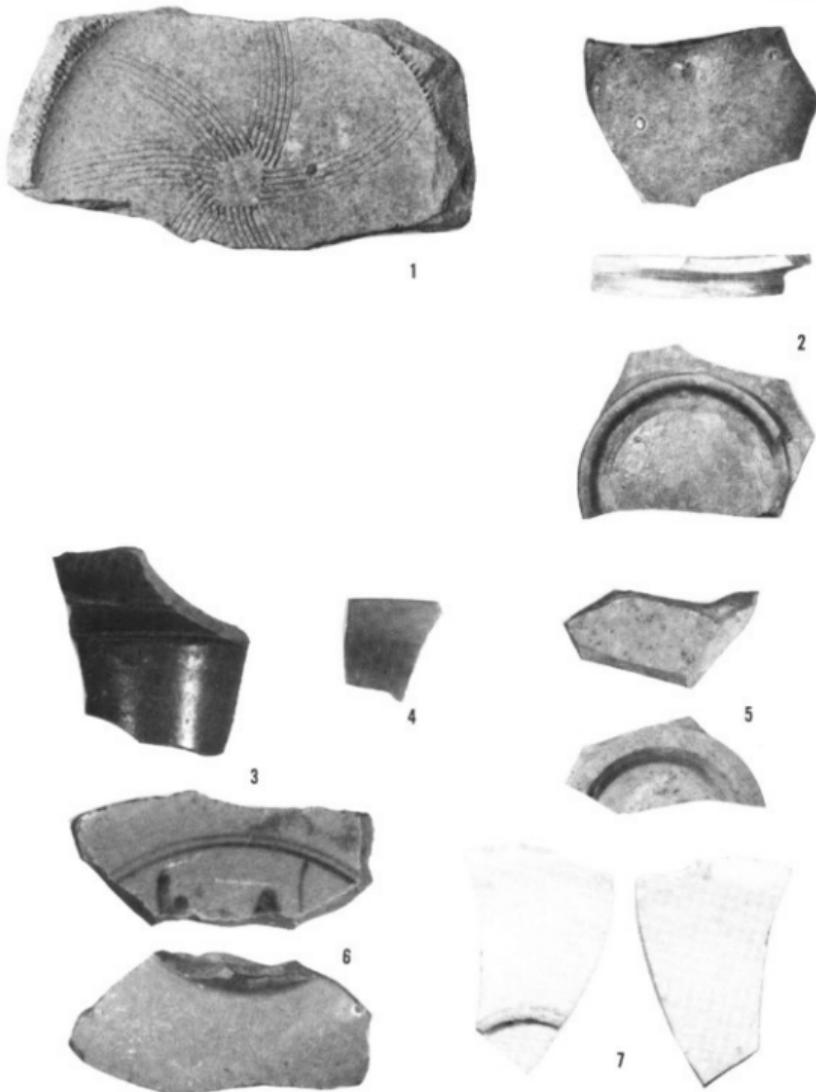
出 土 陶 器

1 C I 地区 P - 08

2 C I 地区 B 3

3 C I 地区 P - 20

4 C I 地区 B 3



出土陶磁器 (C I 地区)

1 陶器 C I 地区

5 磁器 P - 15

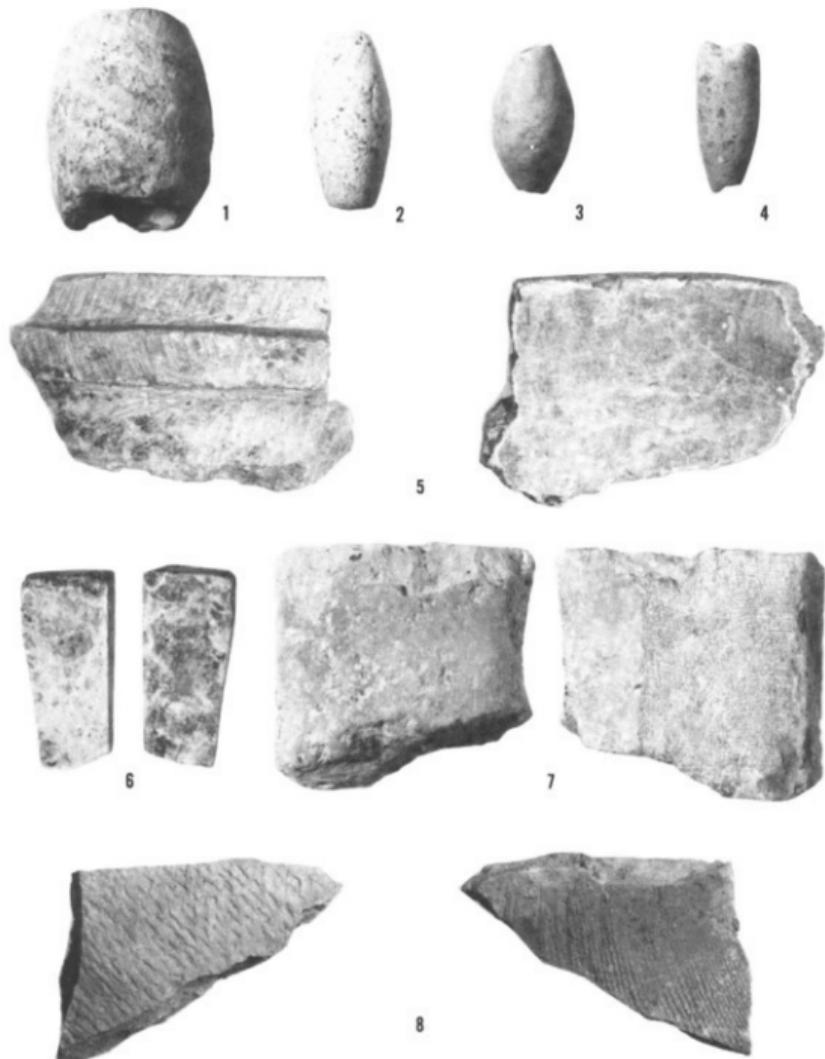
2 绿釉陶器 S D - 05

6 磁器 P - 15

3 青磁 P - 15

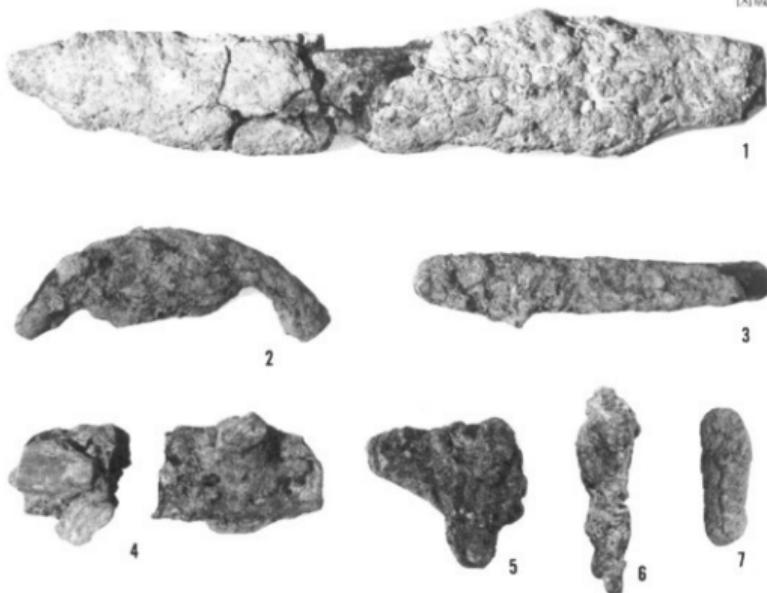
7 白磁 S D - 06

4 青磁 P - 15

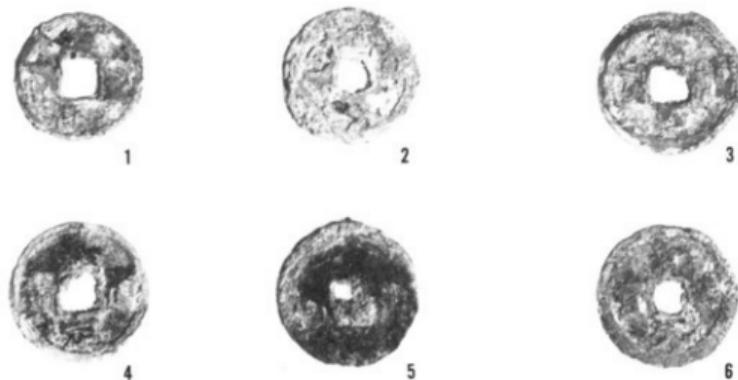


出土土锤·石锄·砾石·丸瓦·平瓦

- |                 |                 |                   |
|-----------------|-----------------|-------------------|
| 1 土锤 C I 地区D-2  | 2 土锤 C I 地区P-02 | 3 土锤 C I 地区S D-05 |
| 4 土锤 C I 地区     | 5 石锄 B II 地区    | 6 砾石 C I 地区P-15   |
| 7 丸瓦 C I 地区P-15 | 8 平瓦 C I 地区P-20 |                   |



出土 鉄 製 品  
1・2 C I 地区 SK-16 3～6 C I 地区 7 C I 地区



SK-16 土 壤 堆 出 土 古 錢  
1 元 豐 通 寶 2 景 祐 元 寶 3 景 祐 元 寶 (篆 書 体)  
4 嘉 定 元 寶 5 肇 廣 元 寶 ? 6 景 祐 元 寶

徳島市埋蔵文化財調査報告書第13集

阿波国府跡第2次調査概報

— 1983年度 —

昭和59年3月31日

編集 徳島市教育委員会社会教育課

発行 徳島市教育委員会

印刷 グランド印刷

